エチオピア駐在員の便り vol.4

# スモーキングベアの ラリベラ生活日誌

高原謙二（たかはら・けんじ）
2005 年 12 月から 2007 年 12 月まで赴任
ＦＦＦ初の男性駐在員。子供の頃からシュバイツアーに憧れ、大学を卒業後、海外青年協力隊としてタンザニアへ。帰国後、13 年間ＮＧＯオイスカでアジア各地で活躍するが、アフリカへの夢断ちがたく、ＦＦＦのプロジェクトに参加。1964 年岡山県生まれ。

## 1. 徒然なるままに 2006 年 4 月

この便りは、エチオピアの首都アジスアベバで書いています。でもこの便りを皆様が読まれ頃には、ラリベラに戻ってフー太郎の森基金の正式な駐在員として業務に携わっていることでしょう。本日 3 月 11 日土曜日、アジスアベバの空は若干曇っているものの、陽射しは強く、晴れやかな朝で始まりました。アジスアベバには、現駐在員の村上愛子さんと共に上京し、駐在員交代の為の手続きで、お役所廻りをしています。何処の国でもそうですが、外国人が NGO や会社等で長期に駐在して活動しようとするならば、労働許可証を取得しなければなりません。また、エチオピアでの身分証明書の取得やフー太郎の森基金の銀行口座引継ぎ等、色々と駐在員として持っていなければならないものが多々あります。それでやっと駐在員として活動できる最低条件が整うのです。

但し、ここエチオピアは、私が今まで某団体で駐在した国々よりも手続きが煩雑な様です。政府宛のレター（ 手紙 ）や書類が多々必要であり、政府から貰う書類への認印（ハンコ）の数も半端ではないようです。と言って、エチオピアの方針ですので、それはそれで私達の活動の為には、色々なお役所をグルグルと廻って、色々な書類やレターを提出し、担当部署からのハンコを押して貰って、やっと私の駐在が政府から許可されるのです。これもまたエチオピアの特色の一つと考えて、今までの駐在員同様にまた月曜日からお役所廻りに精を出して廻ってきます。

さて、私がエチオピア、特にラリベラで過ごして 2 ヵ月以上が過ぎました。ラリベラでは、何か特別なことをしたわけでもなく、私達のプロジェクトを見て廻ったり、事務所で会計の仕事をやったり、その他頼まれた仕事をこなしたりしていました。私的なことでは、スタッフの家を訪ねたり、土曜市場で 1 週間分の食料の買出しをしたり、スタッフやラリベラで出来た数少ない友達とビールを飲んだりしました。

兎に角、先ずは新しい環境になれ、今後の仕事の為にも自分にあった環境作りを心掛けていました。しかし、いまだに慣れないものがあります。それはエチオピアの主食のインジェラとアムハラ語です。インジェラは皆様もご存知の様に平たい円盤のようなパン（？）みたいなものです。これは酸っぱく、酸っぱいものが嫌いな私には不具天敵の様な存在で、友人等から食事に招かれた時には何とか食べる様にしていますが、その時には涙を呑んで口に押し込んでいます。アムハラ語は、年齢の所為か、6 ヶ国語目（現在は日本語、英語、タイ語、タガログ語、スワヒリ語のそれぞれが日常会話程度出来る）の所為か、はたまた語学的才能がない所為か分かりませんが、とにかく覚えが悪く、簡単な挨拶程度しかできない私は会話に四苦八苦しています。ラリベラに戻ったら早急にアムハラ語の先生を見つけて、真剣に習わなければと考えています。その一方で、新しい言語を学ぶことにも飽き、“言葉は習うより慣れろ”で良いと思う怠惰な気持ちも出てきているのも本音で、相反する気持ちの葛藤にゆれています。

最後に、今まで駐在員であった村上愛子さんがこの 3 月末にて退任されます。男性の社会的立場が強いここエチオピアで、多々ご苦労もあったことと推察しています。その環境に於いても組織をまとめ、活動に尽力されたことを皆様がご存知のこととは考えますが、ここに記すと共に、私に活動し易い環境（組織や活動内容等）を引き渡してくださいましたことに、感謝申し上げます。長々と書き綴りましたが、今回はこの辺で失礼します。また便りを認めますので、その時まで皆様お元気でお過ごし下さい。

## 2. 生徒が聖都(?)にやってきた 2006年7月

皆様、こんにちは。日本の夏をいかがお過ごしですか？こちらは、雨も降りだして、過ごし易い日々を送っています。

さて、今回は先ずはお詫びから。前回の便りで、不倶戴天の敵と書くべきところ、不倶天敵と書いてしまい、私の母親から情けないとお叱りを受けました。よって、若い FFF の支援者の皆様は、この様な情けないことにならない為にも知識をしっかり身に付ける様にして下さいね。

さて本日 7 月 2 日、こちらラリベラでは日本からの台風（？）が通り過ぎようとしています。大型台風の京都文教大学 16 名、小型台風の新妻代表と支援者の皆様 4 名の総勢 20 名が、靴音を雷音に、ツバキ唾を雨に、騒々しい声を風音に変えて、6 月 24 日にラリベラに上陸しました。しかし、私の予想に反して勢力は弱く、清々しいそよ風のみを残して通り過ぎていきそうです。

台風の日程は、初日に小学校を訪れて、古着の贈呈。2 日目は、緑化各プロジェクトの見学。3 日目は、スタジアムグリーンパークでの植林とメダゲにある貯水池の見学と記念植樹。この間に縫うようにして岩窟教会群の見学等が入り、慌しい日程でした。その後、小型台風は、ゴンダール、アジスアベバ、タイのバンコクを通過して、日本で低気圧となったことでしょう。また、大型台風は、現在もラリベラに停滞中で、独自のプログラムのゼミを消化して、現在こちらで休息中。その後勢力を蓄えて、ゴンダール、アジスアベバで猛威を振るった後、7 月 6 日に日本に戻る予定です。

こちらは、その各々の台風を受け入れる為に、この 3 週間程は準備等に忙しくしていました。雨季間近である為、植林の準備や貯水池造成の追い込み（雨季中は作業が困難な為）等の通常の業務に加えて、台風襲来の準備（ホテル、バス、食事の手配や大学のゼミの手配等）で疲労困憊です。今回の台風の備えで何かと頭を悩ませたのは食事で、来訪者各々の好みが異なり、彼らに何を食べて貰えば良いか分からなかったので、結局は数種類のオカズとパン、スパゲティー、インジェラ等の主食数種類を各々選べるようにして出すことにしました。

それにしても私も早婚であれば、今回の学生達位の年代の子供達がいても可笑しくはないのですが、如何せん未婚で子供のいない身であり、社会に出てからは、ほとんど海外で過ごしている私にとっては、学生達が来るまで如何様に接すれば良いか頭を悩ませていました。私にとって、学生達の世代のイメージは、学級崩壊や少年の凶悪犯罪の多発した世代と混同していて、落ち着きの無く、よく切れ易い青年達ではないかと戦々恐々としていました。しかし、実際の彼らは私の予想を大幅に反してまっとう真面で、ホッとしています。現地スタッフ達のプロジェクト等の説明にもメモを取ったり、現地の人達と上手にコミュニケーションを図ったりしていました。

特に、子供達と共に遊ぶ時の彼らの笑みは、爽やかなもので、報道などのメディアで得た彼らの世代のイメージを私から大きく払拭してくれました。因みに、大学生達の今回のゼミは、日本の某小学校の生徒達から小学生達の遊び等の 9 つのテーマを聞き取りなどによって調査して、エチオピアの小学生達に伝え、その反応や現地の小学生達の様子など（各 9 テーマ）を再度日本の小学生達に伝えるというもので、なかなか相互理解に有効ではないかと思えるゼミでした。兎に角、ゼミで学生達が伝える日本の小学生達の様子を現地の小学生達は、食い入るように聞き入り、また色々な質問や自分達のことを色々と発言してくれていた様です。

あと、今回の台風で印象に残るのは、1 人の年配の参加者です。この方は愛知県より参加され、小型台風から分裂して、現在もこちらに滞在しています。この方は、自分の手で 1 本でも多く植林しようと朝早く植林地である山の斜面へ出掛け、黙々と植林してくれています。言葉の問題もなんのそので、独立独歩で現地の人達を従えて、木を一本一本丁寧に植えてくれています。

若さ溢れる学生達と 70 歳代のこの年配者。この方々がラリベラの人々に如何様に映り、如何様な印象を残してくれたのかは分かりませんが、この方々から良きものを見出して欲しいものです。また、学生達にもラリベラの人々から感じられた美徳などを見習って、これからの人生に反映してくれれば、嬉しいのですが･･･。では、またいつか皆様にお便りします。

## 3. 幻想火（ゲンソウか？） 2006年10月

8月31日夜11時過ぎ。

事務所のトタン屋根を叩いていた雨音もいつの間にか止んでいた。あてがわれた狭い自室で僕は GIGI（エチオピア女性歌手）のアルバムを聞きながら、ベッドに寝そべり本を片手に“ニャラ”（1 箱 50 円弱）と云うタバコを燻らしていた。

そろそろ寝ようかと考えていた僕の鼓膜に、叫び声が突然舞い込んできた。悲鳴とも泣き声とも区別の付かないその女性の声は、徐々に人数とボリュームを上げ、以前いたフィリピンで聞き慣れた銃声も数発響く。心拍数が一気に跳ね上がり、頭もパニック。反政府ゲリラ、強盗団、狂人の無差別殺人など悲鳴と銃声の関連で想像できることが頭に押し寄せてきた。ヤバイ。その刹那に闇が僕を取り巻く。停電。更にヤバイ。

観音開きの鉄板窓を薄く開ける。霧に立ち込められた闇。止まない叫び声と数発の銃声がまた轟く。西の方角かと様子を窺う。仄明るい。誰かの足音がこっちに来る。反射的に窓を閉じる。蝋燭の灯りを頼りにパスポートや現金等を入れたシークレットベルトを腰に巻き、服を着ていく。誰かが事務所のドアを叩いている。玄関横の窓から伺うと門番のダスタオが手招きをしている。開錠して玄関からでると、左手前方に炎が、ちょろちょろと天に向かって触手を伸ばしている。

脇に駐車しているピックアップの荷台に登って眺める。通りを挟んだ対面にして距離約 50 メートル。行き付けの飲み屋等がある辺りに火の手が上がっている。夜霧の中で踊る炎。取り囲むように増える人々の影が蠢き、幻想の様なシーンが浮かび上がる。しかし、火の手の近くには、我々が度々給油する燃料販売所がある。ドラム缶に詰まったガソリン等が引火すると大事になり、事務所まで火の手が押し寄せてくるのではと考える。脈拍も少し収まり、冷静さを取り戻そうとする僕は、事務所近くに最近越してきた新婚のスタッフに、何時でも夜逃げの態勢を作る為にドライバーを寄越す様に電話を入れる。

暫らく庭（駐車場）から様子を見ていると火の勢いも弱まり、誰かが隣家の屋根に攀じ登り、バケツで水を掛けているシルエットが浮かぶ。怒鳴り声と家屋が倒壊していく様な音。たぶん住民達が消火活動をしているのだろう。僕も彼らと一緒に消火に手を貸したいが、あの銃声が気になり、火事場騒動等が起こる危険性も考えて塀に囲まれた庭で、不謹慎ながらタバコを吸いながら静観していた。

時計の針が 12 時半を追い越した頃、ドライバーがやっと到着する。銃声等の理由（こちらでは、問題が起こり、人手等が必要な時は警官が銃を発砲して住民に知らせるとの言）を聞き出して、やっとドライバーと共に恐々と火元に向かう。近所の家財道具が、道端に積まれている。夜霧に浮かぶ老若男女はガビ等を纏い、2、300 のやじ馬と化している。男達がシャベルで土を被せている焼け爛れた空間は、燃料販売所（ 小屋 ）の跡。壊された水道管からは水も溢れ出ている。鎮火作業も順調に進んでいる様だし、闇に怪しく蠢く人々に怖気付いた僕は、早々に現場を立ち去った。

翌朝火災現場跡を覗いてみると全焼していた。隣接していた家々は、焦げ跡のみで燃えた様子も無く、燃料販売所には、夜間誰も寝泊りしていなかったことが幸いして、誰かが火に巻き込まれたとの噂もでなかった。しかし、焼け跡には燃料が詰まったドラム缶は 20 本近くもあったそうで、全てパンパンに膨れ上がっていたとの話が耳に届き、それらが引火したらどうなっていたかと想像が頭を駆け巡った。

兎に角、火災前に雨が降って湿っていたこと、雨季で水が豊富だったこと、火元と隣家が全て土壁やセメントでできた家屋だったこと、発見と消火活動が早かったこと等の理由で、延焼を免れたのだろうと推察する。イヤハヤ何とも、桑原桑原。大事にならなくてホッとすると共に僕をパニックに陥れた銃声による警報を何とかサイレンなどに換えて貰えないかと考える。

## 4.パソコンデータ崩壊　2007年1月

新年、1月5日、朝7時。事務所のパソコンに電源を入れても起動しない。いわゆる立ち上がらない状態。ヤバイ、ヤバイどうしよう、パニックが忍び寄る。この日は、日本事務所へ2006年の会計報告を提出する最終期限なのだ。事務局長の怒りの形相が瞼をよぎる･･･。怖い。何度も必死になって、祈る思いでパソコンの電源を入れなおすが、画面に出てくるのはエラーの表示ばかり･･･。どうもパソコン本体の調子が悪いようだ。とにかく、パソコンの復活はあきらめるが、前日夜まで睨めっこしていた、会計報告書がぱぁーだ。かろうじて昨年10月上旬までのデータは他の機器に保存されていたことだけが救いである。

昨年12月はアジスアベバでのお役所参りで本当に忙しかった。年末年始の休暇も返上して、愚痴をこぼしながら2006年の会計報告書を作成してきた。この日に手直しをしてメールで送信。一時的に忙しさから解放されると夢見ていたのだが･･･。ことは緊急事態。日本事務所に電話。通じない。何度かけても通じない。次の日は、やっと取れた飛行機チケットで、またまたアジスアベバに赴く予定。再度、役所へのお百度参りが待っている。この日以降は、エチオピアクリスマスやティムカット（お祭り）等の休日が重なって、エチオピアの国内は帰省ラッシュ。その上、外国人旅行者ラッシュも重なり、バスや飛行機も満席で、アジスアベバ行きの交通手段がなかなか確保できない。次の日のアジスアベバ行きは外せない。現実直視。時間も助っ人も望めない。
私個人のパソコンを持ち出して、会計データを入力始める。スタッフの報告等も上の空でデータの入力、また入力。昼も夜もアジスアベバで買ってきたインスタントラーメンをすすりながら、ただひたすら、入力、入力。そして、夜明けと共に一段落。携帯用の機器にデータを保存し完了。あとはアジスアベバのインターネットカフェで、会計報告をメールに添付して送信すれば完璧だ！

ところが、そんなにうまくはいかないのが人生なのか。結局6日はアジスアベバ行きの飛行機が遅れて、メールは出来ずじまい。7日はエチオピアのクリスマスと日曜日で、馴染みのインターネット屋を含め､ほとんどの店が閉まっていた。それでも根性で、開いている店を見つけて、会計報告を無事に送信。こんなにホッとしたことはないかもしれない。

次からまた忙しい日々が始まる。

## 5.断　食　2007年4月

断食と云うと皆様、如何様なイメージを持つのでしょうか？ハンガーストライキ、断食治療等。宗教上で云うと仏教等の僧侶の苦行、イスラム教徒のラマダーンを先ず思い浮かべるのではないでしょうか？ここラリベラにも断食があります。と言っても、イスラム教徒のラマダーンの話ではなく、エチオピア正教会の断食ですが･･･。

しかし、私の印象で言うと断食と云うイメージではなく、期間限定の“断ち物”と言った方が良いのではと考えます。そして3月中旬現在は、年内のうちで一番長い断食の時です。こちらの断食の方法は、肉、卵、ミルク等の動物性たんぱく質をこの期間内に摂取しないことだそうです。また、午後3時まで、何も口に入れない。と言うのも正式な作法だそうです。と言っても、若干個々でそれぞれ解釈が異なっています。ある人は、魚肉であれば、断食の時にも食べても良いと言います。ある人は、午前中10時以降から食事等を取っても良いとのたまうのです。兎に角、エチオピア正教会の断食の時期は、年間を通じて地雷の様に仕掛けられています。

先ず、毎週水曜日と金曜日の両日。更に8月上旬からの15日間。そして避けようの無い地雷原は2月の上旬からの約2ヵ月間がこの断食に当たります。エチオピア国内では、キリスト教プロテスタント派やイスラム教、他の宗教等が混在して定住している場所が多々あり、それぞれ断食の時期等が異なるので外人等には影響ありませんが、ここラリベラはエチオピア正教会のいわゆる聖地で、住民の殆どが正教会の教徒です。よって、この時期ラリベラに滞在する異教徒等はその影響を大きく蒙るのです。特にこの長い断食中は、町中にある肉屋から肉と言う肉が総て姿を消します。

そうなると動物性たんぱく質を摂取する手段は、①土曜市場の時に卵を 1 週間分買い漁る。②首都等に行って、肉の缶詰等を持ち帰ってくる。③ラリベラには観光客用に幾つかのホテルがあるが、その内 3 ヵ所のホテル・レストランで旅行者向けに肉料理を出すので、そこで食する。④鶏を何処かより手に入れて、自らの手で屠殺解体をする位です。金さえあれば、大きな冷凍庫を購入し、事前に保存する方法もありますが･･･。(停電に備えて、ジェネレーターがあればなお良いのですが･･･。)

ラリベラの異端者且つ異教者である私。菜食主義者でも禁欲主義者でもない私。何よりミートラバーの私は、断食の時は、冷凍庫の購入以外は総てを試みます。土曜市場で卵を買い漁り、出張でアジスアベバに出る時は、コーンビーフ等の缶詰を少しずつ買い溜めていく。また、ときたま鶏を飼っている家から購入して、事務所のトイレでコッソリと絞める。そして事前に沸かして置いた熱湯に鶏を潜らせて、羽毛を毟り、解体作業をします。

今年は、エチオピアのイスラム教徒達がラリベラに来て山羊か羊を屠殺して食べようとした所、こちらの住民に見付かって、騒ぎが起こり、警官の威嚇発砲で沈静化されたとのこと。現地スタッフの話では、外人に対して寛容ではあるらしいのですが、この期間はラリベラで肉を食べるのも一苦労です。しかし、この長い断食が終わると、途端に肉一色の日となります。最終日当日までに、各家庭で山羊や羊、金持ちは仔牛等を購入しおきます。そして、最終日が過ぎると共に屠殺して、家族友人達を招いての宴会です。昨年はスタッフの各家庭を廻って、ゲップが山羊肉臭くなるほど食べました。今年もその日に向かってカウントダウンで迎えようとしています。

## 6. ラリベラ・ソウ(人) 2007 年 7 月

まとわりつく子供達。道を歩く私たちに「ハロー、ハロー」を連呼する青年達。そう、今年も一過性の台風が総勢 22 名で通り過ぎた。6 月上旬より雨季に入っていたため、今回の日程はほとんど雨の中で進行し、雨と泥にまみれる活動を余儀なくされた。

それにしても、日本からのツアーに対するラリベラの人々の反応は面白い。道端にたむろする青年達は、日本人に取り入ろうとする。ご存じのようにラリベラは、世界遺産に登録された岩窟教会群がある。その関係で海外からの観光客がやってきて、現地にお金を落としていく。青年達は、ホテルの前や観光コース等で待ち構え、“下手な鉄砲も数打ちゃ当たる”方式でやたらめったら声をかけるのである。もちろんこの洗礼を今回のツアーの人々も受けたのである。また、村の道を歩いていると幼い子供たちに「ハロー」と声をかけられることが度々ある。その後に「ペン」や「マニー」が付いてくる。これらは、「ボールペンちょうだい」「お金ちょうだい」という意味なのだ。ツアーの人々は、またまた洗礼である。

小生にも近所との付合いがあり、たまに食事やコーヒーセレモニーに招待されることがある。ある時、学校教師の家に招待された時のこと。教師であるご主人が、○○を小生に買ってもらえと子供たちに言ったり、○○が欲しいと目の前で子供が親におねだりして見せる事があった。もちろん、親は止めも叱りもしない。ラリベラの人々は、時として赤裸々な姿を見せてくれる。子供達がねだるのは、大人達が知恵をつけて言わせているのではないかと勘ぐってしまう。それもこんな体験をしているからか。

しかし、今回書いたことはラリベラの一面であり、金品とは無関係に友好的な人達が多数いることも事実です。青年達が観光客から何かを貰おうとするよりも、もっと観光客がラリベラに来るようにして、もっとお金を落とすようなシステムを自分たちで作り上げることが必要と考える。観光収入を得るには、観光客達がもう少し気持ちよく金銭を出せるように、皆で知恵を出し、観光地ラリベラを作り上げてもらいたいものである。

## 7. 神のご加護　2007年10月

突然ですが、皆様は調髪（？）をどの位の頻度で行きますか？私の場合、耳に髪が被る頃に散髪するので、約2、3ヵ月毎に散髪屋に行きます。しかし、アフリカで散髪をする場合、気を付けなければならないのは、髪質が東洋系とは異なるということである。

皆様もご存知のように一般的に彼らの髪は強いカールが懸かっていると云うことで、調髪の仕方も東洋とは少々異なる。男性の場合は、主にバリカンを使って、全体的に刈り上げる。だから、坊主頭になるのである。私は、エチオピアに赴任してからも散髪に行っているが、坊主頭になるのが怖くて、ラリベラの散髪屋には行かず、アジスアベバに出張した時に行く様にしている。

ラリベラの散髪屋では、直毛を散髪する機会がないので二の足を踏む。アジスアベバの場合は、西欧系や東洋系の人達も増えてきており、幾つかの散髪屋では直毛の人達の散髪も何とかこなしてくれる。普段はＪＩＣＡ事務所の近くにある理髪店で散髪して貰うのであるが、私のアジスアベバでの宿泊先とＪＩＣＡ事務所がかなり離れている。そしてそこまで行く時間を作れなかった今回は、宿近くの少々高級そうな理髪店で試してみた。

その店は、西欧系モデルの調髪ポスターも貼ってあり、そのポスターを指差してこの髪型ができるかと問うと問題ないとの答えが返ってきました。椅子に腰掛けると陽気なオバサンが取り出してきたのは、やはりバリカン。最初の内は、生え際や頭横側を少しずつ刈っていたが、後側になると大胆となり、思いっきり刈ってくれて、前部と頭頂部のみ刈り残されると言うポスターと似ても似つかない面白い髪型が出現した。この髪型で2、3ヵ月を過ごす気にもならず、前部と頭頂部も刈って貰い、とうとう見事な坊主頭が出来上がった。

兎に角、エチオピアでは直毛の人達の為の散髪屋を探すのが厄介だ。例えば、ケニアやタンザニア等の他の東アフリカ諸国だったら、インド系等の人達も多数居る為、その様な人達の住む近くの店を探せばもっと手軽に見付かる。しかし、エチオピアの場合は、その様な人達が住む割合が少なく、手当たり次第に試してみるか、アジスアベバに住む邦人の方々より情報を貰うしか方法がない。よって、適当な散髪屋を探し出せなければ、長髪で過ごすか坊主頭にするしかないのである。

私の場合、発汗作用が良くて簡単に髪が汗で濡れる。また、油分も多い為、以前、総髪にしようとして、長髪を試みたが毛先が当たる場所が痒くなり、諦めた経験がある。坊主頭も顔が下膨れに見える為、どうしても好きになれない。別に私はファッション等には興味があるわけでなく、頭髪にも特に気を掛ける方でもない。朝起きても寝癖を簡単に手櫛で直すだけで、ヘアトニック等の整髪料を使うわけでもない。でも、やっぱり髪は適度の長さが欲しいものである。